

## 自主シンポジウム D5

**異文化適応と心理教育**

企画・司会 : 小林 亮 (玉川大学)  
 話題提供者 : Janjira Wangwan (お茶の水女子大学)  
               : 山田 祐子 (葛飾区立松上小学校)  
               : 李 雪玉 (宇都宮大学)  
               : 小林 亮 (玉川大学)  
 指定討論者 : 渡辺 文夫 (上智大学)

**企画趣旨**

文化間の流動性が著しく高まった全球一体化時代の現代において異文化との対峙は日常的な学習過程の一部であり、異文化に対する適応方略の発達は重要な心理教育的課題である。本シンポジウムでは、多文化共生に向けての心理教育的支援の課題と展望について、主として個人内における異文化間能力の育成という観点から考察する。具体的には、①道徳性の発達と異文化理解、②異文化間トレランスの形成と国際理解教育、③労働者の文化的越境と社会変動、④留学生の異文化適応、という視点を設定し、それぞれの問題状況における適応課題と支援の事例について検討する。青少年において文化の多様性を受容し、そこから生じるストレス状況をアイデンティティ形成にどう生かしていくかという「文化変容」(acculturation)への発達的条件と、より適応性の高い「文化変容」を促進するためには学校教育および地域社会に求められる支援のあり方について、文化比較的の視点および学際的視点を交えながら議論を深めたい。

**話題提供 1 : タイの青少年における感謝心  
— 向社会的動機づけとの関連 —**

**Janjira Wangwan**

タイの青少年において、助けてもらった際に生じる感情、認知と向社会的動機の高揚の関連のありかたを探るために、タイの小学5年生、中学2年生、高校2年生、および大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、タイの学生において、感謝心における感情には、喜び、援助者への賞賛の気持ち、負債感情の3つの感情変数があることが分かった。小学5年生は、「援助者が母以外」の場合、賞賛の気持ちが向社会的動機の高揚と関連を持っていた。それに対して、大学生は「援助者の母と親友」においてのみ賞賛の気持ちが援助者のコスト、そして向社会的動機の高揚と関連を持っていた。一方、中学2年生および高校2年生は、「全ての援助者相手」において賞賛の気持ちが援助者のコ

スト、そして向社会的動機の高揚と関連をしていた。結果は、タイの学生において、「賞賛の気持ち」が、主として向社会的動機の高揚と正の相関をもつことが示された。以上の結果は、タイの青少年における感謝心の発達の姿を示唆している。

**話題提供 2 : フィンランド人児童と日本人児童における異文化間トレランス**

**山田 祐子**

異文化間トレランスとは「異文化接触の過程において生じる葛藤や不安な状況を乗り越え、異質な文化的要素を受け入れられる能力や資質」として定義できる。この定義に基づき、フィンランド共和国の小学校6年生（男子17名・女子26名、計43名）と日本の小学校6年生（男子68名・女子48名、計116名）の児童を対象に、異文化間トレランスについて4つの日常生活の場面状況を用いた質問紙調査を行った。結果からは、主に以下の三点が明らかになった。第一に、『日本人児童よりもフィンランド人児童の異文化間トレランスの方が高いだろう。』という仮説(1)に基づいて調査を行った結果、本研究の量的調査からは日本人児童よりもフィンランド人児童の方が感情面、行動面、理由のすべてにおいて異文化間トレランス得点が高いことがわかった。第二に、『児童がそれぞれの質問項目で「寛容」「非寛容」「無関心」などで表わしている態度には質的に異なるものが多いつかある。』という仮説(2)に基づいて調査を行った結果、仮説の部分で示した異文化への寛容、非寛容、無関心のタイプ以外にも、非寛容と無関心な態度には、新しいタイプがそれぞれ見られた。それらのタイプには新たに、共感性があることによって自文化と同化することが望ましいと考える非寛容な態度や、異文化が自己に関わることではないと考え無関心な態度になるといったタイプであった。第三に、『異文化間トレランスの概念は「異文化接触の過程において生じる葛藤や不安を乗り越え、異質な文化を受け入れられる能力や資質(寛容・耐性)』であるので、寛容な態度をもっている児童には耐性も備わつ

ている。』という仮説(3)に基づいて調査を行った結果、寛容な態度として判断し量的調査において得点化した児童であっても、質的分析からは必ずしも寛容に伴つて耐性の態度が児童に備わっていることは確認できなかつた。以上の結果から、フィンランド人児童と日本人児童を同じ寛容、非寛容、無関心のそれぞれの態度に位置付けていても、それぞれの態度の理由付けや行動の内容がそれぞれ異なっていることから、今後は寛容、非寛容、無関心な態度という分類だけではなく、異文化間トレンジスを何らかの適切な形でそれらの態度の段階を示すことのできる分類が必要であることが示唆された。今後も異文化間トレンジスの多文化間比較を継続し、異文化間トレンジスの定義の明確化と、今後の国際理解教育のカリキュラム開発につなげることを目指したい。

### 話題提供3：中国の労働力移動問題と文化的移行体験

李 雪玉

現代中国においては、「改革・解放」政策の実施後、経済が急速に発展している。とりわけ、近年の中国の経済高度成長は世界の注目を集めている。経済の発展と産業構造の変化に伴い、就業構造も変化してきた。上海が中心となる「長江三角州」と深圳が中心となる「珠江三角州」などの沿岸部において都会化が進行するとともに、内陸部との所得格差が拡大している。都会と農村、沿岸と内陸との「経済格差」は、現代中国の情勢を捉える鍵概念である。

所得格差の存在と深刻化が労働力の移動を促進するのは必然的である。ペティ・クラークの見解によると、経済が成長するにつれ、産業別就業者の構成は第一次産業から第二次産業へ、さらに第三次産業へと移動する。即ち、農業部門から非農業部門への農業労働力移動である。中国では、農業労働力移動現象は50年代に発生し、80年代から90年代以来著しくなってきた。特に近年、農村部での就業機会の不足、耕地面積の減少、農業収入利益の低下、農民の税負担の増加などの原因で、農民たちの経済的な負担がますます強いられている。貧困状態から脱出するため、農閑期を中心に農村から町や沿岸地域の大都市へ出稼ぎに行く労働者、すなわち中国で「農民工」と呼ばれる人が増加の一途を辿っている。ここでは農村から大都市に移動した出稼ぎ労働者がどのような心理的適応課題を抱えているか、そして社会的サポートシステムが移住労働者の適応問題の改善にどのような役割を果たしているかを社会学と心理学との学際的視座のもとに考察したい。

### 話題提供4：留学生の社会的アイデンティティと異文化適応－ドイツ人留学生と中国人留学生の事例

小林 亮

社会的アイデンティティには異文化接触における適応的機能があると考えられる。文化的越境者としての留学生の社会的アイデンティティ、とくにその評価的側面としての「集合的自尊感情」(Crocker & Luhtanen, 1990)が、彼らの異文化適応プロセスにどのような効果を及ぼすかを、来日したドイツ人留学生および中国人留学生を対象に検証する。自文化アイデンティティを維持しつつも、異文化の特質を肯定的に評価し、積極的に摂取しようとする「統合」パターンの文化変容(Berry & Sam, 1997)をもたらす社会的アイデンティティとはどのようなあり方なのかを探り、それを通じて文化的越境に際して留学生が直面する自尊感情の葛藤にどのような心理臨床的援助が有効なのかを探るのが狙いである。

調査は、国費留学生ないし交換留学生として来日したドイツ人留学生32名(男子22名、女子10名)および中国人留学生32名(男子10名、女子22名)を対象に、質問紙およびインタビューによって行われた。質問紙は①自らの社会的アイデンティティについての評定、②ローゼンバーグの自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)、③日本についてのイメージ、④自国(ドイツ・中国)についてのイメージ、⑤日本での適応状況という5側面についての質問から構成されていた。

結果は、重要な帰属集団として、ドイツ人、中国人とも「家族」を挙げた者が最も多かつた一方、ドイツ人は「人類」や「ヨーロッパ人」といった抽象度の高い概念を重要な帰属集団に挙げた者が多かつたのに対し、中国人は「国家」を重要な帰属集団に挙げたが多く、また帰属の対象はドイツ人のほうが中国人よりも多様であった。日本についてのイメージはドイツ人のほうが中国人よりも概ね良好であった。相関分析では、個人的自尊感情の高さが日本での適応と高い正の相関を示し、異文化適応において、まず個人的自尊感情の果たす役割に注目して研究を進める必要性が示唆された。全体として、留学生の異文化適応において自尊感情が重要な役割を果たすことは示されたが、個人的自尊感情と社会的アイデンティティの関係の解明は今後の研究課題として残された。また留学という文化的越境行為のもつ個人史における発達的意味について、出身国において支配的な文化的意味空間と関連づけながら、ナラティブ・アプローチ(「語り」)の視点からの考察を進めてゆきたい。